

新潟県における「犬の子朔日」の変異と変遷

Variation and Transition of the "Innoko-Tsuitachi" in Niigata Prefecture

阿部 敬¹

ABE Satoshi

新潟県中越地方を中心にしてかつて行われていた年中行事「犬の子朔日」について、文献調査と聞き取り調査を行い、他行事との関連や移行の状況を共時・通時に検討した。資料の充実している柏崎市と湯沢町を中心に検討した結果、まず犬の子の団子を配置する場所には南北の地域差があり、長岡以北は障子の棧等、柏崎以南は床の間・神棚になりやすいことがわかった。また、犬の子の団子の配置場所が障子の棧等、仏壇・寺院となる場合は釈迦涅槃に関連付けられ、ときに涅槃会の団子まきにも供されていた。この関連付けは1850年代から1900年頃のことと、団子まきへの編入は1930年代以前である。その後、犬の子朔日が失われてもなお犬の子の団子をいれた団子まきがみられる。あわせて、配置場所が床の間・神棚となる場合は山の神に関連付けられ、ときにその行事である十二講にも供されていた。十二支の団子を編入した十二講が独立する時期は1890年代から1930年代と考えられた。この2つの変遷は犬の子の団子の配置場所、おろす日、意味、おろした後に行われる行事は異なるが、各要素間の関係、意味機能の獲得や変化の方向性、変化の時期などの点で共通し、構造的に同型である。

はじめに

新潟県中越地方を中心にして「犬の子朔日」（インノコツイタチ）と呼ばれる年中行事がある。正月末日頃に米の粉で十二支等の形の団子を作り、2月1日に障子や戸の棧あるいは床の間などに並べて飾るというものである。行事の起源はわかっていないが、長岡では17世紀前半には存在したといわれ、資料上では18世紀後半から20世紀中頃まで行われていたことは確認されている。実施経験や見たことがあるという話を一部で聞くことができるため、まだそう遠い記憶というほどでもないかもしれない。

しかしながらこの行事に関して集中的に検討されたことがほとんどなく、わかっていることはまだ少ない。近年ようやく、歴史的には小正月から2月中旬に実施される複数の行事と様々な意味を付加しながら、次第に取り込まれて内容を変えていったことが分かってきたところである（阿部2022）。他行事との関係を探り、変異の実際や、歴史的変遷を明らかにできれば、この行事の実態解明に一層近づく可能性がある。

本稿では、新潟県の独特な年中行事である「犬の子朔日」とその関連行事について記録資料および筆者の聞き取り調査の結果を中心に検討し、その変異と変遷の容態を明らかにする。

1. 研究の背景

「犬の子朔日」の初出資料は現在のところ1777年（安永6年）、深沢村五郎八組割元格だった高頭三郎左衛門家の「年中家来賄方當テ仕事巻物所持覚書帳」（大竹1988）である（阿部2022）。行事の内容については、幕府の右筆だった屋代弘賢の呼びかけに応じて越後国長岡藩の儒学者、秋山朋信（景山）が提出した答書『越後国長岡藩領風俗問状答』（鈴木1990）により初めて明らかにされた。このとき行事の意味はよくわからないものとされ、のちに秋山の答書を筆写、解題して『北越月令』（平山1969）を記した小泉氏計（蒼軒）においてもさらなる調査が必要とされていた。

比較的近年の記録では、釈迦涅槃のお供とするもの

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9

や、神棚（山の神）に飾り豊作を祈る（山口 1967）と聞き取った例もあるが、しかしこれらの意味は行事名になっている「犬」との関係がつかめないため、起源とは異なるものと考えられてきた。春亥の子とする説（宮本 1942、新潟県教育委員会 1965、文化庁 1971、渡辺 1971、鶴巻 1989）や餅犬や花かけにつながる初春の豊産の予祝行事とする説（西角井編 1958）が提示されているが、いずれも予想にとどまっており、前者については否定的な意見もある（柳田 1939、小林 1937・1942）。

他地方の行事との関連も指摘されてきた。秋田県南部の餅犬（もちいぬ）と関連するという予想は古くからあり（中山 1934、柳田 1939、小林 1942、亀井 1996、石郷岡 2004、菊池 2006、溝口・中山 2011）、もとは犬だけだったとの予想（柳田 1939）や、新潟県や能登半島の涅槃会の団子まきに伴う犬の子の団子との関連をみる指摘（溝口 2017b）がある。福井県のインノコトに関連するという予想（柳田 1939）については、名称以外の接点がないことから否定的にみる意見（田中 1962）もある。新潟県十日町市に伝わるシンコ細工のちんころと関係があるのではないかという示唆もあるが（森谷・西ほか 1963、山口 1967・1972・1976、溝口 2012）、そのようにみなさない考え（横山 1980）もある。

横山旭三郎（1980）は、新潟県内における犬の子朔日と他行事との関係に着目し、釈迦涅槃に関係するものと山の神に関係するものとの2者について検討した。釈迦涅槃に関するものは、2月1日に飾った犬の子の団子を2月15日の釈迦涅槃の日におおして食べたり、釈迦団子やハナクソ団子などとよばれる小さな団子に混ぜて撒いたりする。山の神に関するものは、2月1日に飾った犬の子の団子を2月9日または12日に食べたり、山の神の行事である十二講（じゅうにこう）に供えたりする。その分布を示したのはこの論考が初めてであったが、分布の示唆するところについて横山の言及はなかった。

阿部敬（2022）は長岡市の事例について、犬の子朔日の期日、製作物、行為、場所等の諸要素を抽出して行事内容の変遷を検討した。結果として、この行事の名称「犬の子朔日」が18世紀後半の文献上に初めて見え、19世紀後半から20世紀前半にかけて、晦日そば、正月じまい（納め正月等の名称がある）、ノドクビ朔日（同じくクツワ朔日等）、涅槃会（同じく釈迦涅槃等）といった他の行事と部分習合していき、20世紀後半には釈迦涅槃の日の団子まきに組み込まれ、独立する過程を

明らかにした。また釈迦涅槃の日との関連付けは19世紀後半以降の変化であり、団子まきへの編入が文献上に登場するのは1935年からであるとされた。

しかし長岡以外の地域の状況や横山の提起した山の神との関係についてはいまだ不明な部分が多い。まずは横山の検討（1980）以降、40年以上が経過して数倍に増加した調査記録の全体把握が必要であり、それを基に分析を行う必要がある。

2. 目的と方法

本論の目的は犬の子朔日の変異と空間的な広がりを明らかにしたうえで、現在も各地に認められる関連行事の変異と変遷を知ることである。

検討する資料は犬の子朔日および関連行事の記録で、主として市町村史や民俗調査記録を取り上げる。一部筆者の聞き取り調査を加えている。論中で長岡の犬の子朔日の歴史的変遷（阿部 2022）を随時参照する。長岡の変遷が最も長い期間にわたって追跡することができ、年代的な空白が少ない上、20世紀前半と思われる時期の状況が詳細に調査されているからである。

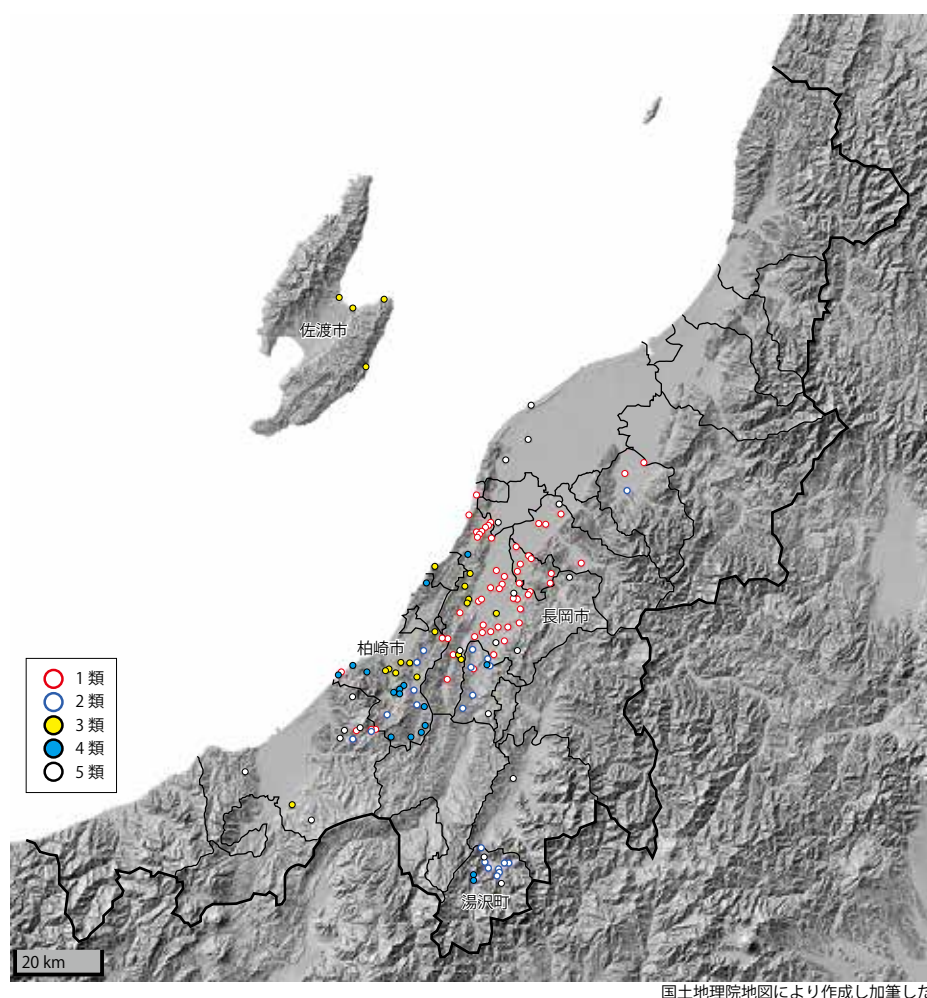
3. 資料の分析

（1）1次行為と2次行為

新潟県の犬の子朔日と関連行事の広がりをみると、かつては中越後（小泉 1849）、信濃川流域（大平 1895）、新潟県中部地域（小林 1951）、新潟県中越地域を中心に（新潟県教育委員会編 1965、横山 1980）などとされており、筆者の文献調査でもこれが追認された。本論ではこれに佐渡市を加える。

県内事例を詳細に見ると、犬の子朔日および関連行事が記録された地区は、新潟市3件、五泉市3件、三条市5件、燕市1件、出雲崎町2件、柏崎市36件、見附市10件、長岡市48件、小千谷市8件、南魚沼市1件、湯沢町19件、上越市15件、佐渡市5件、計156件である（付表）（註1）。件数の多さは組織的な調査の実施と強く関連しているが、大略としては中越北部と湯沢町に集中する傾向がわかる。また中越のなかでも魚沼市、南魚沼市には非常に希薄で、十日町市と中魚沼郡津南町には現在のところまったく認められない。これは横山の示した分布ともおおそ一致する傾向といえるだろう。

分析はまず、犬の子朔日の核心部分である犬の子の団



国土地理院地図により作成し加筆した

図1 犬の子朔日関連行事の分布

子（種々の呼び方があるが一般的な名称としてこれを用いる。）を飾るまたは供える行為を1次行為、そこから犬の子の団子をおろす際ないしはおろした後の行為を2次行為とする。両行為の期日、行為内容、場所する場所を抽出する。抽出結果は付表にまとめたので随時参照されたい。付表中の語はおおよそ原典に依拠している。

（2）分類と分布

行事の要素を抽出することによって、柏崎や湯沢には山の神ないし十二講と関連する事例が多いこと（横山1980）が追認されるが、ほかにも地域ごとに飾る（供える）日や場所に多様な変異が存在することがわかる。

このような変異の多様さを、犬の子の団子をおろす日や、おろす日の行事で分類することももちろん可能である。しかし筆者の集計では、おろす日が記載されている事例は半数程度で（後述）、おろす日の行為がその意味

を伴って（意識的に）行われていることが確認できる例は少ない。

また、歴史的に見ても、行事の元来の意味が伝わっていないことに起因して、行事の意味や存在が2次行為に依存していたり、1次行為を失って2次行為だけが残ったりする例もまま見受けられる（阿部2022）。

したがって比較的后代になって加わったとみられる2次行為だけでなく、旧来の形を残している1次行為を分析対象にすることも重要と考えられる。

そこでまず、上記の表から抽出しうる地域間変異を、1次行為で犬の子の団子を配置する場所によって1類から5類に分類し、その分布を示しておく（図1）。この分類および分布の特徴は次のようである。

1類：犬の子の団子を障子や戸の棧、框（かまち）、長押（なげし）など、屋内の部屋間または屋内外空間の境界、出入口に配置するもの。場所に

関する意味が伝えられている例はない。この分布は長岡市から見附市を中心に認められ、東は五泉市、西は上越市西部に及ぶ。ただし魚沼郡域（魚沼市、南魚沼市、湯沢町、十日町市、津南町）には認められない。1類の多くは釈迦涅槃と関連付けられている。

2類：犬の子の団子を床の間に配置するもの。場所に関する意味が伝えられている例は多いとは言えないが、山の神と説明されることがある。またおろす日が山の神の日（2月または3月の9日か12日）となる例が多い。柏崎市から小千谷市と南魚沼郡湯沢町とに多く認められ、出入口に配置する例と同様、五泉市、上越市西部に及ぶ。

3類：犬の子の団子を仏壇、寺院に配置するもの。西山丘陵周辺から東頸城丘陵北側、上越市板倉区、佐渡島の東部に認められる。寺院に配置する場合は、その全てが涅槃会の法要後に行われる団子まきに取り入れられている。犬の子朔日を前提としている場合と、独立している場合とがあり、独立している場合には犬の子朔日の伝統がなかった地域もある。佐渡市のシンコまきがこれである。

4類：犬の子の団子を神棚に配置するもの。形態的に異なるが、「雪の祠」とされていた事例もここに含めた。場所に関する意味は、山の神と説明されることがある。また、おろす日も2月9日や12日が多くみられ、山の神の日（同前）となることが多い。神棚に配置する例は柏崎市西部に多く見られ、1～3類と比べて該当件数が少ない。

5類：1～4類に当てはまらないもの。長飯台に並べるもの、食べるだけで配置する場所がないもの、さらに配置場所が不明なものも含めた。

（3）犬の子朔日の変異と変遷

①柏崎市

A. 町場での衰退

柏崎市の歴史資料として名高い『柏崎』（中村・西巻1915）（以下の資料1）と『西巻家歳時私録』（西巻・西巻1975）（同 資料2）の記述は、同一の家の変遷を知ることができる貴重な資料である。『柏崎市史資料集民俗編』（柏崎市史編さん委員会1986）所収文から引用する。

資料1 柏崎

犬の子一日・・・2月1日

近年ほんの名許に残りて居ると言って好い位。此日奉公人の出替りをする事は昔と変りはない。

犬の子朔日が名ばかり残っていると記述しており、著者の中村葉月と西巻三四郎（進四郎）の実体験か、少なくとも伝え聞いていた行事と推測される。20世紀初頭のことである。西巻家では、この『柏崎』からちょうど60年を経たとき、西巻達一郎と西巻郁子が『西巻家歳時私録』（1975）を記し、再びこの行事について言及している（資料2）。

資料2 西巻家歳時私録

いぬのこつたち

亥の子つたちの行事は全然みたこともないし、西巻家では行われない。中村葉月・西巻三四郎共著の「柏崎」にも大正初期には殆んど見られなくなった行事とある。

（註）山田良平氏が戦後聞いてきた旧高田村新道の四十五、六の既婚の女の人の話として、「実家で藪入りに帰った嫁は一月卅一日の夜までには必ず婚家に帰ります。婚家で米の粉の団子に味噌汁を混ぜてこねた団子を作って食べる。これを「のどくぶり」といいます。この時「いぬのこつたち」の犬の子及び十二支に形どった団子を作り、之を仏壇に飾り、二月十五日の団子撒き当日まで飾っておくことになっているが、その間に子供達が食べ十五日まで飾ってあることは殆んどありません。何でやるのか理由はわかりません。」と。

戦後枇杷島方面の菓子屋で「しんこ細工」の動物を売っていた。藁つとに小枝の先にしんこ細工したものをつけ、入口か何かに吊っておく。

この記録は資料1の内容を引き継ぎ、その視線が歴史的な変化にも向けられている。西巻家においては、犬の子朔日が20世紀初頭には衰退し、20世紀後半にはもはや見た事もないという状況に至ったようである。

一方、旧高田村新道（旧刈羽郡高田村。現柏崎市街地からみて南方にある。）でこの行事が存在したことが記されている。ここに出てくる「戦後」「四十五、六」の人の誕生年は1900～1920年頃だろうから、少なくとも1910年～1930年頃には犬の子朔日が存在し、釈迦涅槃に関連付けられ、確かな年中行事として行われ

ていたと推測される。このとき西巻家では「ほとんど名ばかり」（資料1）なのだから、大きな違いである。町場と農村との違いは地域性と言い換えることもできるのでないだろうか。

B. 1類と3類-涅槃会の団子まきへの移行-

柏崎市の町場から離れた地域の1類と3類に焦点を当てて詳しくみてみよう。

柏崎市東部の東長島では、釈迦のお供をさせるために人や動物を作って、猫と鼠は除外し、障子戸の棧に飾った。2月15日におろすが、その前に子どもが食べてしまうので、あらためて作り直したという（金塚1935・1936）。

この記録は金塚友之丞が「少年時代に親しく体験した」年中行事とされている（金塚1936）。金塚の誕生年が1890年であるから（岩野2016）、その記録は少なくとも1900年前後の状態を表している可能性が高く、時期的にも内容的にも資料2の「註」の事例に近いといえる。その後の調査でも類似の内容が記録されており（柏崎市史編さん委員会1986）、この地区では数十年間ほとんど変化がなかったようである（註2）。

柏崎市内の3類は明後沢、軽井川、南下、新道、成沢、鹿島でみられ（柏崎市史編さん委員会1986）、成沢以外は柏崎市街地からみて東南方向に位置して隣接し、上記の東長島（鷹之巣（金塚1939）も同じ。）や北条もこれに連なっている。地域的に近い関係にあるのかもしれない。

記録によると、明後沢では慶福寺で涅槃会の団子まきがあり、インノコの団子を混ぜている。近年の調査（溝口2014）でも旧北条村に位置する密蔵院の涅槃会の団子まきで犬の子の団子が混ぜられていた。団子まきへの編入は、金塚（1936）の記述には認められないが、三島郡西越村では1935年の報告で寺でも家庭でもまくと言っており（郷土博物館1935）、これ以前に始まっていたのは間違いない。

ほかに、犬の子朔日として供えたり飾ったりせず、2月15日に犬の子ダンゴを供えて同日にまく行為が1例（久木太）確認されている。この例は、おそらくかつて行っていた犬の子朔日が失われ、団子まき当日の行事に一本化されたもので、長岡市山ノ脇（寺泊町1988）や蓮華寺（横山1980）の例と同様と考えられる（阿部2022）。

このことに関連し、佐渡市でも犬の子の団子をまく行事があるが、これとは少し事情が異なる。

佐渡市大川（池田2006）、下久知、夷（中山・青木1938）、岩首（岩首郷土史編さん委員会1992）でも3類（寺院）の例が知られ、シンコ（犬の子の団子）を入れたシンコマきを行っている。佐渡市には犬の子朔日に類する行事の記録がないため、犬の子の団子が編入された団子まきだけが共有されていたと推測される。この地域の最も古い記録は1938年であるから、この共有が始まったのも1930年代以前のことだろう。

C. 2類と4類-山の神の祭への移行-

柏崎市には2類と4類が多い。これらの配置は、町家では「盆にかざりおきて小児をよるこぼす」と記した小泉蒼軒の記述を想起させる。この「盆」は床の間か神棚に配置したと予想されるからである。

小泉が見た19世紀前半の当時、まだ犬の子朔日の意味が不明とされていたことは重要である。20世紀の調査でもその傾向が継続し、おろす期日が決まりがない比率は2類に高い（図2）。

2類の内訳をみると、折居・拝庭（横山1980）、拝庭、鹿島、笹崎、小清水、山澗（柏崎市史編さん委員会1986）で認められるが、いずれも行事の意味についての認識が記述されていなく不明である。折居・拝庭では山の神の日にあたる2月9日におろして食べたが、期日が一致していることに関して記述がない。4日に食べる（笹崎）、15日におろす（鹿島）といった例もあり、床の間に配置することと山の神の日におろすことの対応関係が明確に認識されていたとは言い難い。

4類はどうだろうか。笠島（新潟県教育委員会1965、文化庁1969・1971、横山1980、柏崎市史編さん委員会1986）、米山町（横山1980）、別俣（久米・細越・水上・三ツ子沢）、吉尾、谷根、大沢（いずれも柏崎市史編さん委員会1986）、門出・栃ヶ原・山中・石黒（高柳町史編集委員会1985）、石黒（石黒の暮らし編集委員会2004）、大津（村のあゆみ編集委員会2007）でみられる。

その分布は柏崎市街地からみて西南側に多い特徴がある。柏崎市以外では小千谷市三仏生（佐藤ほか1989）、長岡市小島谷（和島村1993）、同福島町、同蓬平町（新潟県1980）にもあるが数が少なく、4類の比率の高さは柏崎の地域性ともいえる。

おろす日を見ると、2類と同様、特定の行事との関連がつかめないものがある。大沢（柏崎市史編さん委員会1986）、門出・栃ヶ原・山中・石黒（高柳町史編集委員会1985）、大津（村のあゆみ編集委員会2007）、

笠島（新潟県教育委員会 1965、文化庁 1969・1971）ではやはりおろす日の記録がない。谷根では12日に食べたが、山の神の日は9日であり、この期日との関連性は不明である。

しかしまったくないのでなく、2類に比較すれば、他行事を意識したり2次行為に及んだりする例は目立つ。

別俣（久米・細越・水上・三ツ子沢）では2月1日に盆にのせて神棚に供え、5日に食べた。食べる日をノドクビリというおり、ノドクビリ朔日と融合している。

石黒では2月1日に平皿や盆に十二支順に並べて供え、山の神の日である9日におろして囲炉裏で焼いて食べた（註3）。米山町では2月1日に膳に並べて供え、9日に小豆粥に入れて、煮物と一緒に山に供えたという（柏崎市史編さん委員会 1986）。笠島（柏崎市史編さん委員会 1986）では2月1日に十二支を神棚に供え、12日の二番山の神（一番は9日）をインコロシと呼んで、小豆粥に入れて食べた。吉尾では2月1日に膳に入れて供え、9日をインノコガリといって、焼いて食べた。なお上越市でも9日をインコロシ（下川谷）、犬おろし（国田）などと呼んで、山の神の日と認識する地区は多い。これらの2次行為は山の神の祭ないし山の神の日に関係していることが比較的明瞭である。

また、柏崎市付近で山口賢俊が神棚の山の神に供える事例を2件聞き取っている（山口 1967）。この例は神棚に供える1次行為がすでに山の神の祭としての意味があり、これらはおろす日から遡求して意味付与したのではないだろうか。

2類と4類はともにおろす日が9日か12日となる事例が比較的高い比率を占めているため、全体に山の神との関連性が強いようにみえるが（横山 1980）、実際に山の神と認識している地区は少なく、大半は単に団子を食べるという以外の意義を感じていなかった可能性が高い。山の神との関連性や信仰的な求心力がそれほど強くなかったことがうかがえる。

しかしながら2類と4類にわけて比較すると、4類にだけ2次行為が山の神の祭に変化したとみられる事例があり、また1次行為においても山の神と認識している事例もある。つまり山の神との関連性は4類（神棚に供えるもの）においてより強いといえるだろう。

② 南魚沼郡湯沢町

A. 釈迦涅槃と十二支

管見の限り、南魚沼地域（現南魚沼市と南魚沼郡湯沢

町）で犬の子朔日の記録が初めて現れるのは渡邊行一（1936）の報告である（資料3）。

資料3 南魚沼郡年中行事（渡邊 1936）

二月

一日 亥子一日なり。終日業を休んで団子で十二支の形を作つたりして飾る。

南魚沼地域の犬の子朔日は、十二支のほかに、晦日蕎麦ないし正月納め、小正月、十二講との融合関係が認められるが、釈迦涅槃との関係が見られない。十二支の説話は長岡・見附市を中心に広く釈迦涅槃と関係しているが、十二支はもともと釈迦涅槃にまつわるまとまりではないため、十二支と釈迦涅槃が行事の要素として揃わないことは不思議ではない。実際、犬の子朔日に十二支が関連していることが初めて明らかになる資料は1839年の『農家年中行事記』（土田・武田ほか 1980）であって、釈迦涅槃との関連付けよりも早い。南魚沼地域では十二支の要素が釈迦涅槃と集合する前にもたらされ、定着した可能性を示唆している（註4）。

B. 十二講への移行

瀧澤龍太郎（1936）が湯沢町三俣の興味深い行事を紹介している。

資料4 魚沼郡行事小篇『高志路』第22号

三月十二日午前二時頃、苗場山伊米神社の神殿に於いて山の神の祭祀を行ふ、先づ神主のお祓いあり、氏子は十二支の団子、甘酒、カラコ（餅）及鯛若くは干鰯のお供をなしてから、参拝し、其後に神社の森で…（略）

その森では呪文を唱えて弓を射たという。この行事は十二講である。十二支の団子がいつ、なぜ作られるのか、由来等は記されていないが、すでに柏崎の例で2類と4類が山の神と関連付けが行われていたことがわかっている。ここでも犬の子朔日と山の神との関係に注視しながら、年代を追って順に資料をみていこう。

まず、1978年に『湯沢町誌』（湯沢町編集委員会 1978）と『土樽村郷土史 両山』（細矢 1978）が刊行されている。ともに十二支の団子についての記述がある。『湯沢町誌』には、ミソカ正月に団子をこねて「十二のエトの動物」を作り膳にのせて床の間に供えたとし、「一般的には十三日のだんご飾りの時につくって供える」

と付け加えている。

調査地点との違いを指摘しているものと思われるが、この当時において十二支の団子を床の間に供える行為(2類)は小正月13日にする家とミソカ正月である末日にする家とがあり、前者が多いと認識していたようである。続いて、2月12日には十二講が催され、「小正月の十三日にこしらえておいた「十二のエト」を連れて行き、代表してイヌだけを連れていくことが多い」とし、犬の団子が十二講とつながっていたことを示している。

『土樽村郷土史 両山』(細矢 1978)にもこれと似た例が記されており、1月14日に作飾り(団子飾りに同じ。)をするとともに「団子粉で十二支の形を作り、お膳に乗せて床の間に飾った」(古野・中里)(p.374)という。この十二支は正月納めとなる二十日正月に「イヌの形をしたものを残して」(p.377)、ほかは後日子どものおやつとして食べられ、イヌだけは3月12日の十二講で「猫足膳にのせて神社に行った」(古野・中里)。3月12日に十二の干支を床の間に飾る地区もある(滝の又)。

『湯沢町誌』でも『土樽村郷土史 両山』でも、小正月かミソカ正月に作って床の間に供えた十二支の団子を十二講でも利用していたことを明らかにしているが、その一方で、小正月の十二支がミソカ正月に利用されることはなく、小正月とミソカ正月の両方で十二支を飾ったという地区も知られていない。小正月の十二支とミソカ正月の十二支とは同じ内容、同じ機能で期日がずれているものとみなされていたのだろう。

次に、その後の変化を2004年の『湯沢町史双書』(湯沢町史編さん室 2004)からみてみたい。これによると、戸沢では2月28日(晦日)に作って床の間にあげ、犬だけを十二講に連れて行った。中里・谷後・古野・堀切では3月1日をインノコヅイタチとして、「十二支の動物を形作り床の間に飾った」。このうち谷後ではその後、3月12日に犬だけを十二大明神に供えた。中里では3月12日に十二支を作って犬だけを稲荷様(註5)に供えたという。

ここでは小正月に作った十二支や犬を十二講に利用する例はなくなっており、ミソカ正月かインノコヅイタチに作って飾り、これを十二講に連れて行くように変化していることがわかる。しかしこれも戸沢と谷後にしかみられず、『湯沢町誌』にも登場していた中里では小正月からの流用ではなく当日に作るようになり、八木沢、三俣でも当日か少し前に作って供えたのである。このように見てみると、『湯沢町誌』が記録していたのは十二講

が他の行事からの流用から分離、独立する移行経過だったといえるのではないだろうか。

以上の変化はいつのことだろうか。『湯沢町史双書』に協力した話者の生年は1908年～1948年(明治41年～昭和23年)が約91%を占め、語られた状況は1950年以前のこととされる(同書「はじめに」および「凡例」より)。『湯沢町誌』『土樽村郷土史 両山』はそれより約26年前の刊行であるから、大半の話者の誕生年も単純に26年遡てみると1882～1922年と仮定できる。よって採録されている内容の年代は1890年代以降の状況を記録していたと推測される。したがって、小正月等から犬の子の団子が流用されて十二講に編成され、次いで十二講が分離、独立するまでの移行は、1890年代～1940年代の変化を表していると推測される。

先に掲げた1936年の報告(瀧澤 1936、資料4)で十二講に供えられた十二支の団子は、小正月、ミソカ正月、インノコヅイタチ、十二講のいずれかの日(あるいはその前日など)に作られたと推測されるが、元来は十二講に十二支の団子を供える必然性はないのだから、もとはこれら行事のうち十二講に先立つ行事で作られ、のちに十二講に連れて行かないしは十二講用に作られるようになったと予想することができる。年代的にも矛盾はない。

4. 結論

先にここまでの分析をまとめておきたい。

まず、犬の子朔日の行為的な側面に焦点を当てるため、1次行為と2次行為とに切り分け、1次行為で犬の子の団子を配置する場所によって次のように区別した。1類:障子の棧等、2類:床の間、3類:仏壇・寺院、4類:神棚・雪の祠、5類:その他。この分類に基づき分布を検討した結果、1類が長岡市と見附市を中心に、2類が柏崎市、湯沢町、上越市、3類が西山丘陵周辺および佐渡、4類が柏崎市西部に多く認められ、それぞれに偏りがあることがわかった。

次に、柏崎市と南魚沼郡湯沢町の各種事例から歴史の変遷を検討した。柏崎市では1類と3類が釈迦涅槃と、2類と4類が山の神と、それぞれ対応する傾向があることがわかった。長岡市の変遷を参考にすると、1・3類はこの順で変遷したものと推定される。ただし佐渡では犬の子朔日をはじめとする犬の子の団子を使用する伝統がほかにないため、1930年代までに3類として導

入されたものと推測された。

他方、2・4類については、柏崎市では山の神との関連性が4類により強く表れ、湯沢町では逆に2類からおろす日に山の神との関連が強く、2次行為としてしばしば十二講へと持ち出されていた。

上記の1・3類の系統と2・4類系統は、犬の子の団子を配置する場所、おろす期日、おろしてから実施する行事の種類、その意味がそれぞれ異なる一方、犬だけを特別扱いすること、配置する場所よりもおろす期日に重点をおくこと、さらにおろす期日の行事に流用ないし編成され、いずれ分離してその行事に再編成されることにおいては共通の変化を示している。この2つの系統は歴史の変遷において構造的に同型であったと言えるだろう。

ここで注意しておきたいのは、1次行為の配置場所の意味機能は必ずしも2次行為の意味機能から直接明示的に遡及されないという点である。

確かに期日の認識は行事の意味と関係があり、例えば1次行為の配置場所とおろす期日との関係は障子の棧等(1類)と仏壇・寺院(3類)が釈迦涅槃の日である15日、床の間(2類)と神棚・雪の祠(4類)が山の神の日である9日か12日にそれぞれ対応する比率が高い(図2)。

地域社会で比較的篤く信仰されている対象や共同で行われることの多い既存の行事に関連付けることが、行事の意味の明示性を高め、地域社会での共有のしやすさを生み、あわせて期日の認識を強くさせていたのだろう。これらは相互的な関係にある。

しかし同時に、障子の棧等よりも仏壇・寺院、床の間よりも神棚・雪の祠のほうが、期日の明らかになっている(認識される)比率がそれぞれ約20%高く、仏壇・寺院や神棚・雪の祠への配置と期日の認識とが強い相関関係にあることを示している。

おろす期日が1次行為の意味を類推する手がかりになることは間違いではないが、障子の棧等から仏壇への変化のように、1次行為の配置場所が2次行為の意味に影響されて変化した可能性が考慮されるなら、おろす期日は常に元来の1次行為の意味を決定する要素とはなるわけではないだろう。

このことに関して、1次行為で神棚に配置して「山の神」と認識していた例(山口1967)が重要な手がかり

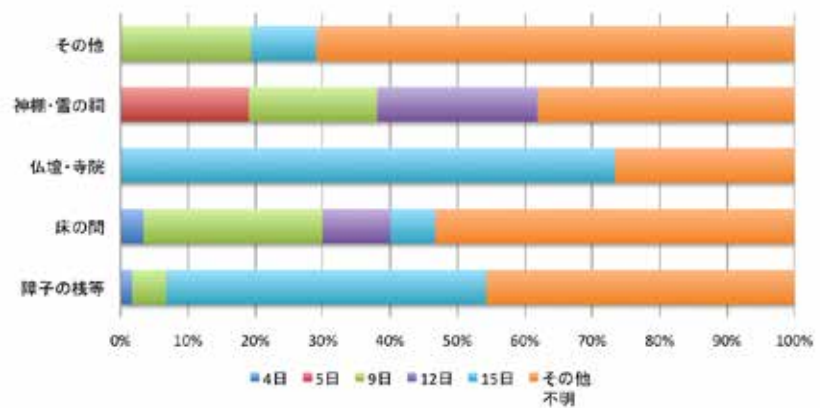


図2 犬の子の団子の配置場所とおろす期日

となる。記録年代上、この例は比較的新しく、それ以前には見られない。2次行為と1次行為とに一貫性を持たせるため、2次行為の意味機能である山の神を1次行為にフィードバックし、配置場所(神棚)および意味機能(山の神)を変化させた例と推定することも可能である。

このように考えることができるのであれば、柏崎市等と湯沢町における2類と4類との違いは共時の地域間変異であると同時に歴史の変遷として読み替えることも可能かもしれない。2・4類の地域的偏りが生じる根本的な原因は不明だが、ここでは山の神の祭である十二講の実施の程度あるいは入念さとの関係することは予想されるだろう。湯沢町に比べて山の神の祭との関連性が相対的に弱かった柏崎市等においては、2次行為の意味機能を共同性のある当日の行事に求めることに困難があるため、これを1次行為に適用し、配置場所に反映させることで行事の意味機能を強化し、行事の維持が企図されたのではないだろうか。フィードバックが初発の動機を補って軌道修正し、行事そのものを強化、促進したと考えるのである。

この予想にもまた十分な検証が必要ではあるが、いずれにせよ歴史的経緯を考慮せずに現状を過去に当てはめることには慎重でなければならない。変化の実態は思いのほか根深く、複雑に入り組んでいる。細かな歴史資料を探り当て、丹念に解きほぐしていくことが肝要だろう。

おわりに

犬の子朔日と関連行事について、その変異と変遷を把握することを目指して検討を重ねてきた。少なくとも新潟県内の全体的な傾向や山の神との関係性は見えるようになったと思う。まだ関係のありそうな事例も多くがあるが、思っていたよりも長くなってしまった。ここで一旦筆を擱きたい。

謝辞

阿部美記子氏、大楽和正氏、松山恭平氏、三国信一氏、溝口政子氏、長岡市立中央図書館文書資料室、新潟県立中央図書館、十日町情報館、十日町市博物館には文献渉猟につきご協力を賜りました。駒形彪氏、高橋理信氏、門脇洋子氏、中町保夫氏、角山誠一氏、大島一夫氏、久保田守利氏、高橋由美子氏、大光寺、長久山本成寺、湯沢市教育委員会、佐渡博物館には聞き取りへのご協力または貴重なご助言を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

- 1: 同一地区としてまとめられた資料でも、集落名が複数明記されている場合はそれぞれ1件として数えた。また同じ地区名でも文献が異なる場合は、文献単位に1件とした。地区名のわからないもの、該当範囲が広すぎるもの、該当地域の調査によらず他地域の調査事例を当てはめたり、推測で書かれたりした疑いのあるものなどは取り扱っていない。以上に該当しないにもかかわらず取り扱っていない資料があれば、筆者の責任である。
- 2: 同じ地区を扱いながら、作る種類を十二の動物とか十二支とする例（新潟県教育委員会1965、文化庁1971）があるものの、金塚（1935・1936）は一貫して十二支とは記述していなかった。東長島は金塚友之丞の出身地である。「十二支」との記述は、記載者による解釈の可能性をはらんでいる。
- 3: 平皿、盆、膳にのせて供える場所は、床の間か神棚に限られていた。この事実は小泉が「盆にかざりおきて」というときに想起される配置場所が床の間か神棚だろうとの予想を補強する。小泉の述べるとおり、これが町家に特有の方法であったとするなら、山の神信仰が篤いとはいえない地区で山の神と関連付けたとしても、行事の維持、継続にとってはあまり効果がなかったかもしれない。西巻家の人々の見た衰退状況はまさにそうしたことを表していたのではないだろうか。
- 4: 「亥子一日」という名称を根拠に元来は春亥の子であったと推測されているが（宮本1942）、春亥の子の内容を示す行事内容はいまのところ示されていない。この説については小林存（1935、1942、1951）はおそらく内容の相違から、そして柳田國男（1939）は名称の相違から、それぞれ否定的である。
- 5: 十二講が初午と融合している可能性がある。
- 6: 商品として市や菓子屋などで販売されたしんこ細工は新潟県、秋田県南部、能登半島でも認められる。なんらかの新しい脈絡で導入され、各地の伝統的な年中行事に影響を与えたと推測されるが、本論では議論の複雑さを避けるため控除した。

引用参考文献

- 文化庁 編 1969『日本民俗地図』I、国土地理協会
文化庁 編 1971『日本民俗地図』II、国土地理協会
五泉市史篇さん委員会 編 1999『五泉市誌』民俗編、五泉市
五泉市史編集委員会民俗部会 編 1990「年中行事」『五泉の民俗』第1集、p.178-182
平山敏治郎 校訂・編 1969「北越月令」『日本庶民生活史料集成』第9巻、p.558-593、三一書房

- 細矢菊治 1978『土樽村郷土史 両山』細矢菊治
細矢菊治 1994『南魚沼郡水無川流域の歴史』大和町水無川流域の歴史を語る会
五十嵐伊三郎 編 1958『解村記念 五十沢郷生活誌』五十沢郷土研究会
池田哲夫 2006『佐渡島の民俗』高志書院
石郷岡千鶴子 2004「モチイヌの信仰」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第3号、p.35-62
石黒の昔の暮らし編集会 編 2004『ブナ林の里歳時記』大橋寿一郎
石内郷土誌編集委員会 編 1967『石内郷土誌』塩沢町教育委員会
板倉町史編さん委員会 編 2003『板倉町史』通史編、板倉町
岩首郷土史編集委員会 編 1992『岩首郷土史』両津市岩首区長
岩野邦康 2016「昭和戦前期の新潟県下越地方における中等教育と在野研究—金塚友之丞の地理教育と民俗研究を事例として—」『学芸地理』71号、p.39-56
出雲崎町史編さん委員会 編 1987『出雲崎町史』民俗・文化財編、出雲崎町
十文字町史編集委員会 編 2003『十文字町史』十文字町
金田文男 2009「冬井の年中行事」『高志路』第371号、p.38-47
亀井千歩子 1996『日本のお菓子 ●祈りと感謝と厄除けと』東京書籍
加茂村誌編集委員 編 1963『加茂村誌』両津市加茂公民館
刈羽村物語篇さん委員会 編 1971『刈羽村物語』刈羽村役場
柏崎市史編さん委員会 編 1986『柏崎市史資料集』民俗篇、柏崎市史編さん室
柏崎市史編さん委員会 編 1990『柏崎市史』上巻、柏崎市史編さん室
菊池勇 2006「菅江真澄 注釈 小野のふるさと」『真澄学』第3号、p.157-159、東北芸術工科大学東北文化研究センター
金塚友之丞 1935「いんのご団子に除かれる動物」『高志路』第1巻第10号、p.44、高志社
金塚友之丞 1936「刈羽山村の正月」『越志路』第2巻第9号、p.25-31、越志社
金塚友之丞 1950「年中行事（県下民俗入門（6））」『高志路』第144号、p.16-21、高志社
小林存 1935『越後方言考』佐藤今朝夫（1975復刊、図書刊行会）
小林存 1942『いんのご団子』高志路第78号、p.18、高志社
小林存 1951『越後方言七十五年』高志社
国学院大学文学会民俗学研究会 編 1956「新潟県中頸城郡吉川町源」『31年度民俗探訪』、p.1-72
近藤勤治郎 1973『三島郡誌』中村安孝、名著出版
越路町史編集委員会民俗部会 編 1997『聞き書き わたしたちの暮らし—越路町の民俗—』越路町史双書 No.4、越路町
郷土博物館 1935「いんの子朔といんの子団子」『高志路』第1巻第9号、p.35・36、新潟県民俗学会
前川のあゆみ研究会 編 2015『前川のあゆみ』前川のあゆみ研究会
巻町 編 1992『巻町史』資料編6 民俗、巻町
見附市史編集委員会 編 1981『見附市史』上巻（1）、見附市役所
見附市史編集委員会 編 1985『ふるさと見附の歴史』見附市役所
宮本常一 1942『民間暦』六人社
溝口政子 2012「八朔の馬、二月の犬」『新潟日報』8月31日夕刊
溝口政子 2014a「長岡・雲出の香林寺の涅槃団子」『＊ブレ・リ＊ 麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/02/blog-post_15.html（2021年9月13日確認）
溝口政子 2014b「長岡・寛益寺の涅槃団子づくり」『＊ブレ・リ＊

* 麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/02/blog-post_13.html (2021年9月13日確認)

溝口政子 2014c「長岡・香安寺の涅槃団子」『*ブレ・リ* 麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/03/blog-post_12.html (2021年9月13日確認)

溝口政子 2017a「ちんころと犬の子朔日」『新潟日報』2017年1月26日朝刊、p.21

溝口政子 2017b「涅槃会の犬の子」『新潟日報』2017年2月16日朝刊、p.17

溝口政子・中山圭子 2011『福を招くお守り菓子 ●北海道から沖縄まで』、講談社

森谷周野 1974「上関田の年中行事」『高志路』第299・230合併号、p.53-55、新潟県民俗学会

森谷周野 1982「東蒲原郡三川村上綱木」『越佐の小正月行事』p.57-71、新潟県教育委員会

森谷周野・西信治・渡辺赳夫・高橋実・佐久間惇一・駒形聡・山口賢俊 1963『インノコツイタチ。神の留守について』『高志路』第199号、p.27-28、新潟県民俗学会

長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会 編 1989『聞き書き 長岡の民俗 (1)』長岡市史双書 No.2、長岡市

長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会 編 1990a『聞き書き 長岡の民俗 (2)』長岡市史双書 No.6、長岡市

長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会 編 1990b『聞き書き 長岡の民俗 (3)』長岡市史双書 No.12、長岡市

長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会 編 1990c『聞き書き 長岡の民俗 (4)』長岡市史双書 No.13、長岡市

長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会 編 1990d『聞き書き 長岡の民俗 (5)』長岡市史双書 No.14、長岡市

長岡市 編 1992『長岡市史別編 民俗』長岡市

長岡市立中央図書館文書資料室 編 2005『長岡城之面影 - 長岡城下年中行事 -』長岡市史双書 No.44

中村葉月・西巻三四郎 1915『柏崎』高桑書店 (柏崎市史編さん委員会 1986 所収)

中之島村史編さん委員会 編 1988『中之島村史』民俗・資料編、中之島町

中山徳太郎・青木重孝 1938『佐渡年中行事』民間伝承の会

新潟大学人文学部民俗学研究室 編 1999『米山の民俗—新潟県柏崎市米山町—』新潟大学民俗調査報告書第5集、新潟大学人文学部民俗学研究室

新潟大学人文学部民俗学研究室 編 2003『大倉の民俗—新潟県北魚沼郡守門村大倉—』新潟大学民俗調査報告書第9集、新潟大学人文学部民俗学研究室

新潟大学人文学部民俗学研究室 編 2014『下久知の民俗—新潟県佐渡市下久知—』新潟大学民俗調査報告書第20集、新潟大学人文学部民俗学研究室

新潟県教育委員会 編 1979『新潟県民俗地図』新潟県教育委員会

新潟県教育委員会 編 1977『越後・佐渡の定期市』第一法規出版

新潟県民俗学会 編 1989『儀礼伝承』『図説日本民俗史 新潟』、p.162-166、佐藤文夫

新潟市史編さん民俗部会 編 1994『新潟市史』資料編11 民俗Ⅱ

西巻達一郎・西巻郁子 1975『西巻家歳時私録』(柏崎市史編さん委員会 1986 所収)

小国町史編集委員会 編 1976『小国町史』本文編、牧野功平

小千谷市史編修委員会 編 1969『小千谷市史』本編上巻、新潟県小千谷市

大平與文次 編 1895「一部落の風俗習慣」『越後風俗志』第3集、p.24-85、温古談話會

大竹信雄 1988「長岡領深沢村高頭家「諸事覚書帳」について」『新潟県の民俗と歴史』p.183-200、駒形聡先生退職記念事業の会

佐藤正英・平沢宏・平沢吉郎・和田智良・新保稔・和田治・和田登喜男・和田庄一郎 1982『三仏生のあゆみ』三仏生区

佐藤武・平沢甲作・佐藤国治・西牧一郎・南雲栄作・中野昌朋・南雲市太郎・小林憲隆 1989『山谷のあゆみ』山谷区

高柳町史編集委員会 編 1985『高柳町史』本文編、新潟県刈羽郡高柳町

三条市史編修委員会 編 1982『三条市史 資料編八 民俗』新潟県三条市

成城大学文芸学物文化史学科 編 1983『菱ヶ嶽山麓の民俗—新潟県東頸城郡安塚町伏野・須川—』成城大学文芸学物文化史学科昭和58年度文化史ゼミナール (田中宣一ゼミ)

鈴木昭英 1990「秋山景山白筆の「諸国風俗問状越後国長岡領答書」」『長岡市立科学博物館研究報告』第25号、p.61-78

高岡功 1982「加茂市黒水」『越佐の小正月行事』p.72-84、新潟県教育委員会

瀧澤龍太郎 1936「魚沼郡行事小篇」『高志路』第22号、p.36-41、高志社

田中宣一 1962「インノコト」『日本民俗学会報』第23号、p.11-15、日本民俗学会

寺泊町 編 1988『寺泊町史』寺泊町

十日町市史編さん委員会 編 1995『十日町市史』資料編8 民俗、十日町市役所

土田隆夫・武田広昭・真水淳 校注・著 1980「天保十年 農家年中行事記 大平與兵衛 著」『日本農書全集』25、p.258-293、農山漁村文化協会

上田村郷土誌編集委員会 編 1976『上田村郷土誌』塩沢町教育委員会

渡邊行一 1936「南魚沼郡年中行事 (2)」『高志路』第14号、p.30-33、高志社

渡邊行一 1971『越後南魚沼民俗誌』常民文化叢書6、慶友社

山田良平 1957『柏崎歳時記』越後タイムス社

山口賢俊 1967「チンコロ」『高志路』第212号、p.53、新潟県民俗学会

山口賢俊 1972『日本の民俗 新潟』p.239・240、第一法規出版

山口賢俊・佐藤和彦 1982『生きている民俗探訪 新潟』第一法規出版

山古志村史編集委員会 編 1985『山古志村史』山古志村役場

柳田國男 1939『歳時習俗語彙』民間伝承の会

柳田國男 1977「歳時小記」『年中行事覚書』講談社学術文庫、p.68-86、講談社

安田町編さん委員会 編 1997『安田町史』民俗編、安田町

横山旭三郎 1980「犬 (戌) 子朔日」『高志路』第255号、p.9-14、新潟県民俗学会

吉田町 編 2002『吉田町史』資料編6 民俗、吉田町

吉川町史編さん委員会 編 1996『吉川町史』第2巻、吉川町

湯沢町史編さん室 編 2004『湯沢町の民俗 (II) 人の越後—湯の里越後・まつりごと—』湯沢町史・双書8、湯沢町教育委員会

湯沢町誌編集委員会 編 1978『湯沢町誌』南魚沼郡湯沢町教育委員会

付表 新潟県内の犬の子朔日関連行事(1)

自治体 (現在)	地区	1次						2次			備考	文献
		行事名称	素材	製作物(名称)	期日	行為	場所	期日	行為	場所		
新潟市	五十嵐二の町	キツネ作り	米粉	キツネ、鶏、犬、地蔵	1月27・28日頃作る	-	-	-	食べる	-	-	新潟市史編さん民俗部会1994
新潟市	西蒲区菅根	いんの子一日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	横山1980
新潟市	釜ノ木	インコ朔日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	巻町1992
五泉市	村松	-	・米粉 ・木	・十二支の動物(米粉) ・犬(木)	-	飾る	床の間	2月9日	犬の団子は持って参る。ほかの団子は食べる。	・山の神(十二支) ・家(木の犬)	-	横山1980
五泉市	清瀬・今泉	-	米の粉	十二支の動物や犬	3月(中暦2月)1日	飾る	戸のさん	-	-	-	-	五泉市史編さん委員会1999
三条市	柳場	いんの子朔日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	横山1980
三条市	井栗・曲淵	亥んの子朔日	-	十二支の動物(インコ団子・ノドクビ団子)	2月1日	飾る	障子の棧	2月15日	おろす	-	-	三条市史編修委員会1982
三条市	糸雨町	-	米の粉	犬・猫？(藁を持つ)、鳥	1月下旬～2月はじめ	飾る	障子の棧	-	ボロボロになったらおろす	-	-	筆者聞き取り2023
三条市	楢山	-	-	十二支の動物	2月1日	飾る	戸の棧	2月15日	犬以外を食べる	-	-	横山1980
燕市	地藏堂	インコー日	-	-	3月1日	-	-	-	-	-	2月正月の頃、3月1日がインコー日	分水町2003
出雲崎町	尼瀬	インコ	-	インコ	2月朔日(3月1日)	作る	-	-	-	-	-	新潟県教育委員会1965、文化庁1969
出雲崎町	尼瀬	-	-	十二支	-	-	-	-	-	-	-	横山1980
柏崎市	米山町	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	飾る	障子の棧	2月9日	おろして小豆粥に入れ、煮物と膳にして山に供える	大田	2月9日はインコロシ。山の神に供える。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	蘆之巣	インコツイタチ	米粉	人・馬・猿・亀・鶏・犬・その他いろいろ(インココ)、猫と鼠は作らない	2月1日	飾る	障子戸の棧	2月15日	団子汁にして食べる	-	-	金塚1939
柏崎市	大字東長島	いんの子正月	普通粉	人・動物。猫と鼠は除外。	1月28日から末日に作る	飾る	戸の棧	2月15日	-	-	15日におろすが、その前に子供が食べてしまうこともある。作り直しをする。	金塚1936
柏崎市	東長島	インコ正月	エリゴ	12の動物。猫と鼠は作らない。	-	つるす	障子の棧、戸のさん	2月15日	おろすと、子供がいたずらしてすぐなくなる	新迎のお供をさせる意味	新潟県教育委員会1965、文化庁1971	新潟県教育委員会1965、文化庁1971
柏崎市	東長島	-	-	十二支の動物(猫と鼠は除く)	2月1日	飾る	障子の棧	-	-	-	新迎のお供をさせる	横山1980
柏崎市	笹崎	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	飾る	床の間	2月4日	焼いたりうぜたりして食べる	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	折居・拝庭	-	-	十二支の動物	2月1日	つけ木の上に並べてお膳にのせ飾る	床の間	2月9日	おろして食べた	-	2月9日は山の神の日	横山1980
柏崎市	拝庭	インコロ朔日	米粉	十二支	2月1日	つけ木の上に並べて盆に供えて飾る	床の間	2月9日	焼いて食べる	-	2月9日は山の神のまつりにあたる。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	鹿島	インコ正月	米粉	十二支	2月1日	飾る	床の間	2月15日	おろす	-	2月15日は団子まき(釈迦の法会)	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	小清水	インコ朔日	米粉	十二支(目にケンボロの木の实を入れた)	2月1日	飾る	床の間	-	-	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	山岡	インコ正月	米粉	犬、兎、猿、鶏、亀など	2月1日	飾る	床の間	-	-	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	別俣(久米・細越・水上・三ツ子沢)	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	盆に飾って供える	神棚	2月5日	焼いて味噌汁にいれたり黄な粉をつけて食べる	-	犬は必ず作る。食べる日はノドクビ。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	石黒	えんのご朔日	米の粉	十二支	2月1日	平皿や盆に十二支順に並べて供える	神棚	2月9日	囲炉裏で焼いて食べる	-	2月9日は山の神の日	石黒の暮らし編集会2004
柏崎市	吉尾	インコ朔日	米粉	十二支(インコ)	2月1日	膳に並べて供える	神棚	2月9日	焼いて食べる	-	1月31日はインコブクリの日。2月9日はインコガリ。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	米山町	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	飾る	神棚	2月9日	おろして小豆粥に入れ、煮物と膳にして山に供える	大田	2月9日はインコロシ。山の神に供える。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	谷根	インコ朔日	餅	十二支	2月1日	盆にのせて供える	神棚	2月12日	家族一同で食べる	-	山の神は2月9日	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	笠島	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	供える	神棚	2月12日	小豆粥に入れて食べる	-	2月12日はインコロシ。二番山の神(一番は2月9日)。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	笠島・米山町	犬ころし(2月1日)	餅	十二支の動物	小正月	供える	神棚	2月15日	小豆粥に入れて食べる	-	2月1日は犬ころし	横山1980
柏崎市	大沢	インコ朔日	餅(糯米と粳米を混ぜた)	十二支	2月1日	飾る	神棚	-	-	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	門出・棚ヶ原・山中・石黒	狗の子朔(いぬのこつたち)	米粉	十二支	2月1日	供える	神棚	-	-	-	-	高柳町史編集委員会1985
柏崎市	大津	インコツイタチ	米の粉の団子	十二支の形	2月1日	飾る	神棚	-	-	-	-	村のあゆみ編集委員会2007
柏崎市	笠島	イコ(インコ)づいたち、亥ノ子一日(亥ノ子ツイタチ)	餅	十二支(クビクワリダンゴ)	2月1日	供える	神棚	-	-	-	-	新潟県教育委員会1965、文化庁1969・1971
柏崎市	軽井川	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	供える	仏壇	2月15日	供えてから撤く	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	南下	インコ朔日	米粉	インコ・十二支(インコ)	2月1日	供える	仏壇	2月15日	供えてから撤く	-	釈迦涅槃の日にあらためて作る	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	新道	いぬのこつたち	米粉	犬の子及び十二支にかたどった団子	-	飾る	仏壇	2月15日	-	-	団子まき当日におろすものだが、それまでに子供達が食べてしまうので残っていない	柏崎市史編さん委員会1986所収(西巻家蔵時私録1975、1952年に稿本作成。)

付表 新潟県内の犬の子朔日関連行事（2）

自治体 (現在)	地区	1次						2次			備考	文献
		行事名称	素材	製作物(名称)	期日	行為	場所	期日	行為	場所		
柏崎市	明後沢	インコ朔日	米粉	十二支	2月1日	供える	仏壇	2月15日	供えてから置く	慶福寺	慶福寺で、釈迦涅槃の日にあらためて作る。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	成沢	インコ朔日	米粉	インコ	2月1日	供える	仏壇	-	さげて子供に食べさせる	-	-	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	久木太	-	-	犬の子ダンゴ	2月15日	供えてから置く	寺院	-	-	-	釈迦涅槃の日に犬の子ダンゴも作って供え、置く。	柏崎市史編さん委員会1986
柏崎市	北条	-	-	十二支の動物(鼠は除く)	2月1日	-	-	2月15日	さげて食べる	-	2月15日は犬の子おろし	横山1980
見附市	牛ヶ嶺	-	うる米	鶏・動物	2月1日	飾る	茶の間の障子の棧	2月15日	おろして食べる	-	おろす前に子どもが食べる	横山1980
見附市	小栗山・釈迦塚・牛ヶ嶺	いんの子一日	悪い米	十二支の動物	2月1日	並べる	障子の棧	2月15日	釈迦涅槃の日にあげる	-	-	見附市史編集委員会1981
見附市	指出	-	-	十二支の動物	2月1日	飾る	障子の棧	2月15日	-	-	-	横山1980
見附市	柳橋・反田・釈迦塚	いんの子朔日	-	十二支の動物	2月1日	飾る	戸・障子の棧・欄間	2月15日	食べる	-	-	横山1980
見附市	杉沢町	インコ朔日、インコ子朔	団子	十二支のインコダンゴ	2月1日	並べた	障子の棧	-	-	-	-	新潟県教育委員会1965、文化庁1969、新潟県1980
見附市	太田	犬の子朔日	-	十二支の団子	2月1日	-	-	-	-	-	この日、農人日待ちもしている。	横山1980
長岡市	脇川新田	エンコ朔日	マゴメ(粳米)粉	エゴノコ(犬の子)や十二支	2月1日	並べて飾る	障子戸の棧	2月4日	おろす(新たに作って寺でまく)	-	2月4日エゴノココウシ。	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990a
長岡市	亀貝・富島・宮下	エンコ朔日	米粉	十二支の動物	2月1日	並べる	障子の棧	2月15日	おろす(寺では新たに作って供えて置く)	-	2月15日は団子まき。団子まきでは新たに作ってまく。	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990b
長岡市	雲出	涅槃会	団子	十二支のインコ(亥の子)	2月13・14日	並べる	障子の棧	2月15日	子どもが焼いて食べる寺ではインコを作って供えて置く	香林寺	団子まきの際にもインコを作って本尊様の壇に飾る。色をつける。ヘビ・ブタ・テディベア、香林寺。	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990a
長岡市	下郷・碓田・木崎・五十分	エンコ朔日	玄米粉	十二支	2月1日	飾る	障子の棧など	2月15日	まく	-	-	寺泊町1988
長岡市	横下	エンコ朔日(ツイタチ)	白米	犬や猫、猫などの動物の形(エンコ)	2月1日	並べる	障子戸の棧	2月15日	寺では新たに色付きを作って置く	-	2月15日は団子まき。新たに犬や猫を作った。	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1989
長岡市	乙吉(亀崎)	インコ朔日	-	十二支のインコ	2月1日	並べる	戸の棧	2月15日	食べる	-	団子投げ前に子供が食べる	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990c
長岡市	栖吉	エンコ朔日	米粉	十二支	-	並べる	戸の棧	2月15日	おろす	-	お釈迦様についてきた動物	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990a
長岡市	野積	-	-	十二支	2月1日	飾る	鴨居	2月15日以降	春田に出るとき焼いて食べる	-	-	横山1980
長岡市	浜田屋	エンコ朔日	米粉	十二支	2月1日	並べる	障子の棧	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990d
長岡市	王番田・寺堂・河根川町	-	米粉	十二支のエンコ	3月25日(月遅れ)	並べる	障子の棧	-	-	-	同日、イリゴ団子の入った団子汁(奉公人の出替わり)	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990b
長岡市	川辺町	エンコ朔日	米粉	十二支	2月1日	並べる	障子の棧	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990c
長岡市	黒津	エンコ朔日	米粉	エンコ	3月1日(月遅れ表示)	並べる	障子の棧	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990b
長岡市	新長・竹森・鯉口	エンコ朔日	米粉	十二支	2月1日	飾る	障子の棧など	-	紙鉄砲で撃ち落としたり焼いて食べる	-	-	寺泊町1988
長岡市	柿	エンコ朔日	米粉	十二支	2月1日	並べる	障子骨	-	焼いて食べる	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990d
長岡市	来迎寺	犬の子朔日	団子	涅槃に居合わせた色々の動物	2月1日	飾る	竖櫛障子の横棧	-	-	-	-	三島郡誌編集委員会1973
長岡市	神谷	エンコツイタチ	米の粉	十二支の動物	2月1日	飾る	鴨居や障子の棧	-	-	-	-	越路町史編集委員会・民俗部会1997
長岡市	西野	団子まき	米の粉	インコ	2月15日	ならべる	障子の棧や鴨居	-	-	-	-	越路町史編集委員会・民俗部会1997
長岡市	西谷	インコツイタチ	米の粉	十二支の動物	2月1日(本正月にも)	飾る	障子の棧や鴨居	-	-	-	-	越路町史編集委員会・民俗部会1997
長岡市	浦	犬の子朔日	米粉	十二支	2月1日	並列す	造り戸の棧、かまち	-	-	-	-	大平与兵衛1839
長岡市	村松	いんのご朔日	粳米粉	十二支の動物	2月1日	並べる	茶の間の長押	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990b
長岡市	寺泊	エンコ朔日	マゴメ	十二支	2月1日	飾る	床の間	-	-	-	-	寺泊町1988
長岡市	六日市	エンコ朔日	米粉	十二支(エンコ)	2月1日	飾る	床の間	-	焼いて食べる	-	7～10日間飾る	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990b
長岡市	百束	エンコ朔日	米粉	十二支のエンコ	2月1日	飾る	戸の棧や鴨居	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990c
長岡市	宮本東方	エンコ朔日	米粉	十二支	-	並べる	欄間や障子の棧	-	-	-	団子に食紅をいれる	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990c
長岡市	前川	犬の子朔日	米の粉	十二支	2月1日	飾る	長押	-	-	-	-	前川のおゆみ研究会2015
長岡市	草生津	エンコ朔日	しんこ	犬のようなもの	2月1日	供える	仏壇	-	-	-	-	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1990d
長岡市	町軽井	エンコ朔日	麦粉	十二支	2月1日	並べる	仏壇	-	お参りした人に配る	-	-	寺泊町1988

付表 新潟県内の犬の子朔日関連行事(3)

自治体 (現在)	地区	1次						2次			備考	文献
		行事名称	素材	製作物(名称)	期日	行為	場所	期日	行為	場所		
長岡市	東谷	お釈迦様の日(団子まき)	米の粉	十二支・白団子	2月15日	配る	寺	-	-	-	延命寺(昔は堂)	越路町史編集委員会民俗部会1997
長岡市	蓬平町	インコ朔日・インコ正月など	雑穀の粉	五穀や蜜のダンゴ	2月1日	並べて飾る	床の間・障子の棧・神棚など	2月9日	おろして焼いて食べた	-	9日はエンコロシ	新潟県1980
長岡市	加津保・桂・亀崎	エンコ朔日	米粉	十二支	2月1日	並べておく	障子の棧、仏壇、床の間	2月15日	おろす	龍昌庵	龍昌庵では新たに色付きき作って置く	長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会1989
長岡市	福島町	インコ朔日・インコ正月など	雑穀の粉	十二支	2月1日	並べて飾る	床の間・障子の棧・神棚など	2月15日	粟火で焼いて食べる	-	-	新潟県1980
長岡市	小島谷	インコ朔日	粟米の粉	犬や亀、十二支の動物	2月1日	飾る	神棚、障子の棧、数居、長押など	2月15日	団子まきする	-	別に作ったものを観音堂でまく	和島村1993
長岡市	十日町	いんの子朔	-	獣	2月1日	-	-	-	-	-	焼いて食べることもある。子供が玩具にする。	郷土博物館1935
長岡市	深沢	犬の子朔日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	大竹1988
長岡市	不動沢	イノコソツイタチ	-	十二支のだんご	2月1日	-	-	-	-	-	禅宗の家だけする	文化庁1969、横山1980
長岡市	山ノ脇	涅槃会	米粉	十二支	2月15日	置く	-	-	-	-	-	寺泊町1988
長岡市	蓮花寺	涅槃会	米粉	十二支の動物	2月15日	供えてから置く	-	-	-	-	-	横山1980
小千谷市	二俣・片貝・西条・若部・三仏生	亥子朔日(イノコソツイタチ)	団子	十二支	2月1日	置く	床の間	-	-	-	-	小千谷市史編集委員会1969
小千谷市	三仏生	犬の子ついたり	米粉	十二支の動物の形	2月1日	供える	神棚	-	-	-	-	三仏生区1982
小千谷市	冬井	いんのご朔日	-	-	2月1日	-	-	-	-	-	-	金田2009
小千谷市	山谷	えんのご朔日	米の粉	十二支の動物	2月	並べる	なげしの上、床の間	後日	食べた	-	-	佐藤ほか1989
南魚沼市	四十日	いんのこついたり	-	-	-	-	-	-	-	-	-	大島一夫氏聞き取り2021
湯沢町	古野・中里	-	団子粉	十二支の動物	1月14日	お膳に乗せて飾る	床の間	2月12日	大だけ猫足膳にのせて神社に参る	神社	-	細矢1978
湯沢町	滝の又	-	-	十二支の動物	2月1日	飾る	床の間	-	-	-	-	細矢1978
湯沢町	熊野	インコソツイタチ	米	十二支の動物	2月末日	飾る	床の間	-	大だけ残して食べた。あるいは全部または大だけを十二講に持って行って山の神に供えた。	(山の神)	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	戸沢	-	米	十二支の動物	2月28日	あげて燈明を上げる	床の間	-	子供に食べさせる。大だけ十二講に連れて行く。	(山の神)	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	谷後	インコソツイタチ	米	十二支	3月1日	飾る	床の間	3月12日	大だけ供える	十二大明神の石塔	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	中里・谷後・堀切	インコソツイタチ	米	十二支の動物	3月1日	飾る	床の間	-	大だけ残して食べた。あるいは全部または大だけを十二講に持って行って山の神に供えた。	(山の神)	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	松川	正月納め	-	十二支の動物	2月末日(新暦)	お膳に入れ飾る	床の間	-	-	-	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	八木沢	十二講	米	十二支のうち犬のみ	3月12日	連れて行く	雪の祠	-	-	-	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	三俣	十二講	米	イゴノコ(犬の仔)と十二支	3月12日	供えた	雪の洞前の台	-	-	-	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	上谷後	-	-	犬の子	-	-	-	-	供える	-	-	新潟県教育委員会1979
湯沢町	下中	-	団子	イゴノコ(犬の仔)	3月12日	供える	-	-	-	-	-	湯沢町史編さん室2004
湯沢町	土樽	いんの子一日、いんの正月	-	-	2月1日	-	-	-	-	-	-	細矢1978
湯沢町	土樽	-	-	犬の子	-	-	-	-	供える	-	-	新潟県教育委員会1979
湯沢町	戸沢	-	米の粉	十二支	-	-	-	-	供える	-	-	新潟県教育委員会1979
湯沢町	古野・中里	いんの子一日、いんの子正月	-	-	2月1日	-	-	-	-	-	-	細矢1978
上越市	上川谷	犬ころし朔日	米粉	十二支の動物	2月1日	飾る	戸の棧とか鴨居あるいは広間の長押	2月8日または15日	焼いて食う	-	2月8日または15日は犬ころし	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	下川谷	インコまたはインコソツイタチ	米粉	十二支の動物	3月1日(月遅れ表示)	並べる	広間のサシの上	3月9日	子どもが焼いて食う	-	3月9日はインコロシ	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	大賀 等	イ(エン)ノソツイタチ、イ(エン)コセチ(狗の子節句)、イヌゴロソツイタチ(犬殺しの朔日)	米粉	十二支	3月1日	並べる	茶の間の長押、障子の棧、床の間	3月9日	焼いて食べる	-	3月1日はエンツクリ、3月9日はエンゴロシ(大賀)	吉川町史編さん委員会1996
上越市	高沢入	次郎の朔日	米粉	・十二支の動物(いぬころし)と山の神さんが會をかぶって馬に乗っている妻の団子、または狐さまの背中に猿が乗った姿	2月1日	苞こに入れてあげる	床の間	2月9日	焼いて食べる	-	2月9日には赤飯を苞こにつめて、あきの方にさげ、鳥に食べさせる。	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	尾神	次郎の朔日とかノドクビとか	団子	十二支の動物(ノドクビ団子)	3月1日	飾る	床の間	3月9日	焼いて食べる	-	-	国学院大学文学会民俗学研究会1956

付表 新潟県内の犬の子朔日関連行事(4)

自治体 (現在)	地区	1次						2次			備考	文献
		行事名称	素材	製作物(名称)	期日	行為	場所	期日	行為	場所		
上越市	下川谷	インコロまたはインコツイタチ	米粉	十二支の動物	3月1日(月遅れ表示)	箱簾に収めて飾る	床の間	3月9日	子どもが焼いて食う	-	3月9日はインコロシ	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	上関田	バククリ団子	カラコ餅	十二支の動物・蛋の形などをした団子	2月1日	列べる	長飯台	-	-	-	-	森谷1974
上越市	宮島	釈迦の涅槃	米粉	花や動物(犬、猿、鳩み たいなもの)	3月15日、3月第2日曜日	供えてから撒く	寺	-	-	-	大光寺	筆者聞き取り2023
上越市	国田	犬づくり	米粉	十二支の動物	2月1日	-	-	2月9日	焼いたり煮たりして食べる	-	2月9日は山の神の日で犬おろし	横山1980
上越市	水野	いんの子祭り	-	十二支の動物	2月1日	-	-	3月9日	犬だけぶら下げる	庭の木	3月9日は山の神の日	横山1980
上越市	大賀	1日は太郎の日、2日は次郎の日	米粉	犬や鶏	3月1日	飾る	-	3月9日	焼いて食う	-	3月9日はエンコセチ	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	大賀	エンツクリ	米粉	犬や鶏(チンコロ)	3月1日	飾る	-	3月9日	焼いて食う 吊るす	-	3月9日はエン殺し	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	村屋	インコロマツリ	団子	十二支(バクビダンゴとも)	3月1日	-	-	3月9日	焼いて食べる	-	3月9日は山の神の祭の日	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	米山	-	-	-	-	-	-	3月9日	焼いて食べる	-	3月9日は山の神の日	国学院大学文学会民俗学研究会1956
上越市	横明	インコツイタチ	粉の団子	犬など(十二支)	2月1日	-	-	-	-	-	-	森谷・西ほか1963
佐渡市	下久知	オシャカサンの日	米粉	赤、緑、黄色で色付けし、猿や犬、下駄、鶏など	4月8日	供えて食べた	仏壇	-	-	-	-	新潟大学人文学部民俗学研究室2014
佐渡市	下久知	しんこ撒き	しんこ	犬・鳥・猿・兎等の動物	2月15日	供えてから撒く	寺、堂	-	-	-	-	中山・青木1938
佐渡市	夷	しんこ撒き	しんこ	犬・鳥・猿・兎等の動物	2月15日	供えてから撒く	寺、堂	-	-	-	-	中山・青木1938
佐渡市	大川	団子まき	米の粉	犬、猿、猿、兎など十二支にちなんだ動物。猫は作らない。(シンコ)	3月15日	まく	寺	-	-	-	-	池田2006
佐渡市	岩首	涅槃会(だんごまき)	シンコ	犬や鳥等	3月15日	供えて撒く	寺	-	-	-	万福寺	岩首郷土史編集委員会1992